水説 sui-setsu

中村 秀明

何のため誰のため

経営のあり方を考えさせられるような集まりに参加した。

20人近い企業幹部が5日間、千葉県木更津市の研修施設に泊まり、古典の抜粋を読んで受け止め方や考えを語り合う。教材はカントの「永遠平和のために」、坂口安吾の「日本論」、プラトンの「ソクラテスの弁明」、古事記や論語、米独立宣言など約40。日本アスペン研究所が1998年から、年3回開くエグゼクティブ・セミナーである。

社命による大企業の部長や新任役員が多いが、中小企業の経営者やNPO（非営利組織）の幹部もいる。結論を導いたり、解釈を一致させたりはしない。議論ではなく、「対話」を通じた発見や意識付けを重んじる。

たとえば福沢諭吉の「学問のすすめ」を読む時間。有名な「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」という言葉の後にこんなくだりがあり、何人かが首をかしげた。

「むずかしき仕事をする者を身分重き人と名づけ、やすき仕事をする者を身分軽き人という」「無学なる者は貧人となり下人となるなり」

武家社会の身分制度が残り、国としての独立自立の意識は薄かった明治初期と知れば、諭吉の教育にかける焦りにも似た意気込みとのみこめてくる。そして、これがこの時代の限界であり、時を重ねて人々の考えと社会が成熟してきたことも理解できる。

「対話」の意味は多様だ。教材となる古典の作者と、他の参加者と、そして何よりも自分自身との対話、つまり自らへの問いかけが重い。

米国発のセミナーを日本でもと呼びかけたのが、富士ゼロックス会長だった小林陽太郎さんだ。設立趣旨として「経営が短期的な思考に陥るのを避けるには、何のためか、誰のためか、と思索を重ねることが大切である」といった思いを記している。

今回参加した50歳代の3代目社長は、同年代との対話の機会がほとんどない中小企業経営者ならではの悩みや危機感を抱え、ヒントを求めて申し込んだという。

セミナーを通じ「日ごろ、自らが考えていることの幅の狭さ、受け止めている物事の浅さを知った。部下が大事なことを発信しているのに『とりあえず、今はいいから』と気にも留めていなかったかもしれません」と語った。

世の流れに反応したり、他社の動きに対応したりではなく、経営者や企業幹部はまず考えるべきなのだろう。

「何のためか、誰のためか」

改革が必要なのは働く者だけでない。

（論説委員）

毎日新聞朝刊3面掲載 2018・3・14